

過度の付度に要注意



バス最高経営責任者 柴田 励司氏

1985年上智大文卒。カルチュア・コンビニエンス・クラブの最高執行責任者(COO)などを経て、2010年6月イ・ンティゴグループ社長(15年11月から会長)。2014年6月から東証マザーズ上場のバス最高経営責任者(CEO)。

最近話題の「付度(そため)として汚れ仕事を(そため)」。オーナー経営者は役員・社員から過度の付度をされやすい存在なので要注意だ。

付度そのものは悪いことではない。付度とは相互の考えを押し量ること。それを丁寧にやってくれる部下は上にしてみたい。期待を察知して動いてくれる部下にはいろいろな仕事を任せようと思う。質問に對的確かタイムリーに回答してくれる部下もそう。頼もしいと思う。これらは部下が上司の視線に立ってあらかじめ課題を整理しているからその業だ。これらは「良い付度」の典型例である。一方、付度される人の「意向」を鑑みつつ、実質的に組織をコントロールしようとするのは「悪い付度」だ。「上の側近には特に注意だ。こ

意思決定に外部の目必要

の人間が茶坊主化している可能性がある。側近が自分の名前を使って、社内に威圧的な態度をとっていたら茶坊主確定。側近から外した方がいい。

自分の態度も反省した方がいい。自分に意見を求める人間に対し威圧的な表情をしたり押さえつけるような言葉を発したりしていないか。そういう態度の経営者の近くには茶坊主が生まれやすい。会社の常識は社会の非常識という言葉があるように、付度した内容が世の中から見ると説明不能なこともある。ここで社外役員や顧問の客観的な目があるといい。何か大きな意思決定をするときは、これら外部の人間に意見を求め、真摯に耳を傾けてみるとよい。現在世の中をにぎわしている付度の実態がどうかはわからないが、政治家と行政という構造が茶坊主を生みやすいことは事実だろう。大衆の支持獲得を考える政治家は短期的な視点、行政は長期的かつ継続性の観点と、判断軸が異なる。内閣はこのバランスを考えた判断すべき存在だと思